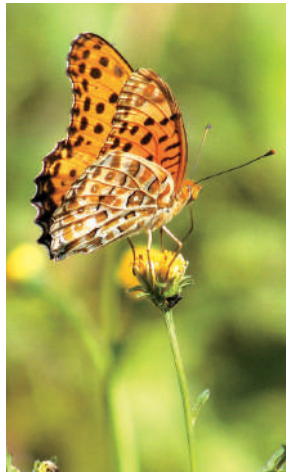
チョウに会いに行こう

チョウに会えそうな大きな緑地や公園を地図にしました。これら以外にもチョウが集まる小さな緑地はありますし、家のまわりでもチョウは見られます。いろいろなところに出かけてチョウを探してみましょう。

※緑地や公園にはそれぞれルールがあります。
採集できない場合があるので、注意しましょう。

大和の自然ハンドブック②

チョウ



大和市

はじめに

美しいはねをもったチョウは、昔から多くの人びとに愛されてきた、もっとも人気のある昆虫といっていいでしょう。

チョウは、ガとともにチョウ目(鱗翅目)というグループの一員です。この仲間は体やはねに鱗粉という、うろこのような粉がたくさんついていて、くるくると巻けるストローのような長い口を持っているのが特徴です。

チョウは種類によって林、草はら、街なかなど、住む場所がだいたい決まっています。ある場所でチョウを見たとしましょう。そのチョウは何のためにそこにいるのでしょうか？　花の蜜を吸うため？　日光浴をするため？　それとも卵を産むため？　たまたまそこにいたということもあるかもしれませんが、ほとんどの場合は理由があるはずです。じっくり観察してみれば、チョウがそこにいる理由がだんだんわかってくるでしょう。

日本では今までに250種類くらいのチョウが記録されています。市街化が進んでいる大和市ですが、市の中央に位置する泉の森をはじめ、いくつかの緑地が市内に点在していることで、2016年現在、50種類以上ものチョウが見つかっています。

この本では大和市で見られるおもなチョウや、その暮らしについて紹介します。

⇧庭のシソで吸蜜するヤマトシジミ

⇧湿った地面で吸水するルリシジミ

⇧日光浴をするルリタテハ

⇩求愛するクロアゲハ(左がメス、右がオス)

表紙のチョウ

①クロアゲハのメス(Y)
②キアゲハ(Y)
③ゴマダラチョウ(A)
④テングチョウ(A)
⑤ツマグロヒョウモンのオス(N)
⑥キタキチョウ(Y)
⑦ウラナミシジミのオス(Y)
⑧ミズイロオナガシジミ(Y)

チョウの観察のしかた

チョウは種類によっているところが違うよ。会いたいチョウがいたら、この本を見て、いそうなところへ行ってみよう。いろいろなところへ行って、いろいろなチョウに会おう！

チョウが花で蜜を吸っていたら観察のチャンス！　あまり動かないので、はねの色や模様をしっかり見よう。

葉っぱにいるときは卵を産んでいるかもしれないよ。

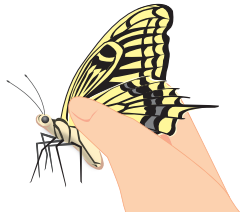
チョウを見つけたらおどろかさないようにゆっくり近づこう。
チョウは急な動きがきらいだよ。

観察には虫に刺されないよう長そでと長ズボンで行こう。

人の家の庭や畑にかってに入ってはいけません。どうしても入りたいときは持ち主にお願いしよう。

デジタルカメラを持っていたら写真を撮ろう。
家に帰ってから名前を調べられるよ。

あみを使うときは、まわりの人の迷惑にならないよう、気をつけよう。
使うあみは柔らかいものを選ぼう。
魚とり用のかたいあみではチョウのはねを傷つけてしまうよ。

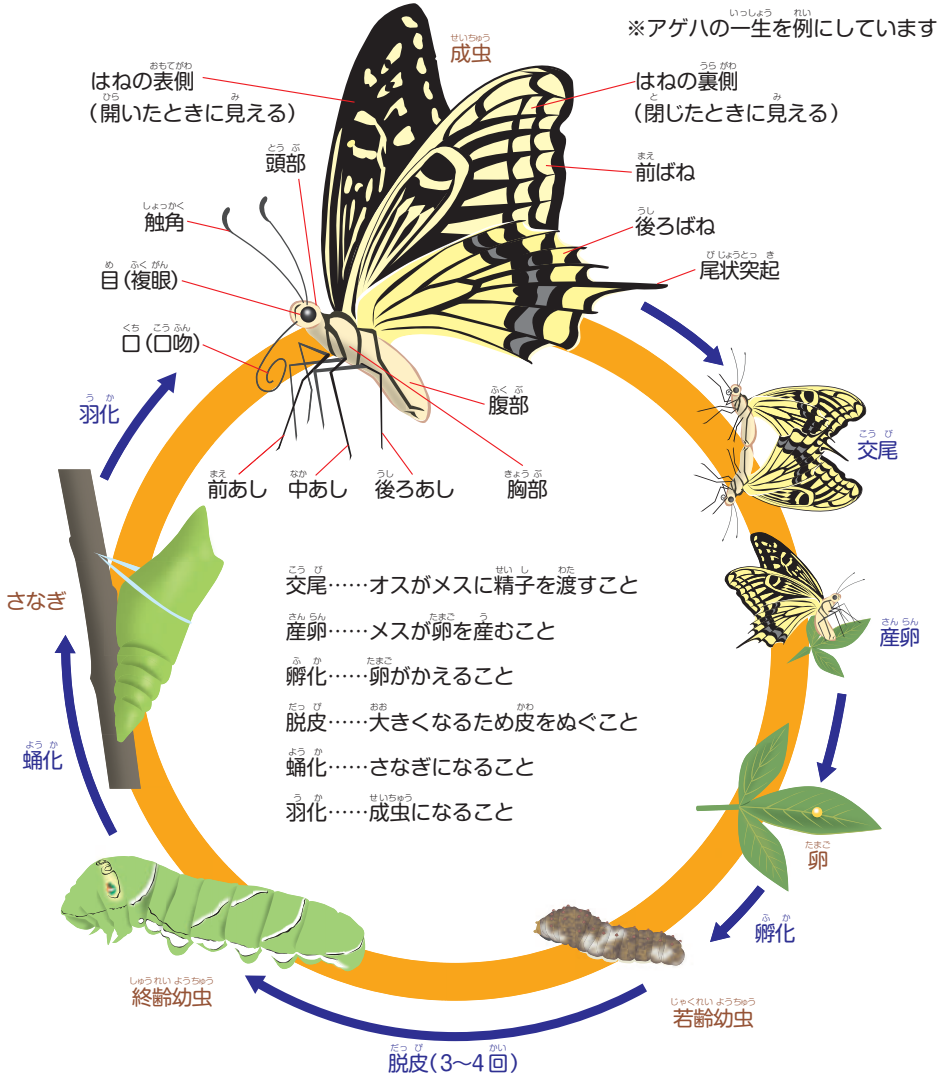


チョウを持つときははねのつけねをつまむようにしよう。
はねの先をつまむとあばれてはねが切れてしまうことがあるよ。

観察が終わったらもとの場所に放してあげよう。

チョウの一生とからだのつくり

※アゲハの一生を例にしています



交尾……オスがメスに精子を渡すこと
産卵……メスが卵を産むこと
孵化……卵がかえること
脱皮……大きくなるため皮をぬぐこと
蛹化……さなぎになること
羽化……成虫になること

チョウはカブトムシやハチと同じように、卵→幼虫→さなぎ→成虫と育っていきます。このような育ちかたを完全変態といいます。これに対してトンボやセミ、バッタなどにはさなぎの時期がなく、卵→幼虫→成虫というように、幼虫から直接成虫になります。このような育ちかたは不完全変態といいます。幼虫は何回か脱皮して大きくなりますが、小さな幼虫を若齢幼虫といい、さなぎになる前の最後の幼虫を終齢幼虫といいます。

この本の見かた

アゲハチョウ科

アゲハチョウ科は黄色や黒の大きなはねをもったチョウがたくさんいるグループで、多くの種類の後ろばねに尾状突起がある。**大和市には9種類いる。**成虫は春から秋にかけて2〜3回現れ、いろいろな花を訪れるが、花に完全にとまることは少なく、はねを羽ばたかせたまま蜜を吸うことが多い。オスは湿った地面で水を吸うこともある。多くの種類の幼虫がミカン科の植物の葉を食べて育ち、幼虫は危険を感じると臭いうの（肉角または臭角という）を出して身を守る。アゲハチョウ科の中には幼虫で冬を越すものもいるが、大和市にいるすべての種類がさなぎで冬を越す。

アゲハ（ナミアゲハ）

春 夏 秋 LL

はねはさんの黒い筋が入ったうすい黄色。キアゲハに似るが前ばねのつけねは黒い筋になっている。幼虫はミカンやサンショウなどの葉を食べ、家の庭に植えられているミカンやユズ、キンカンの木で幼虫が見られることもある。

科の名前
日本のチョウは大きく5つのグループ（科）に分かれます。ここには科の名前が書いてあります。

科の説明
その科のチョウに共通する特徴などが書いてあります。

種の名前
ここに書いてあるのはそのチョウの名前です。別名があるものはカッコ書きしています。

チョウの写真
そのチョウの特徴が分かる写真です。写真中のアルファベットは撮影者を表します（19ページ参照）。

種の説明
そのチョウについての説明です。

春 夏 秋 LL

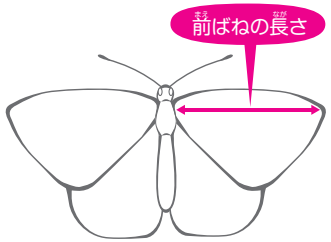
写真の下のマークの説明

見られる季節 … そのチョウの成虫が見られる季節を表しています。

春…3〜5月　夏…6〜8月　秋…9〜11月

大きさ … そのチョウの前ばねの長さを4段階で表しています。

LL…前ばねの長さが40mm以上。アゲハチョウくらいの大きさ。
L…前ばねの長さが30〜40mm。タテハチョウくらいの大きさ。
M…前ばねの長さが20〜30mm。シロチョウくらいの大きさ。
S…前ばねの長さが20mm以下。シジミチョウくらいの大きさ。



見られる場所 … そのチョウの成虫が主に暮らす場所を表しています。

…森や林などのうす暗いところ
…森や林などのはし（林縁）の明るいところ
…草はらや畑など
…家のまわりや校庭、公園など

見つけやすさ … そのチョウの成虫がどれくらい見られるか表しています。

◎…とてもたくさんいるので、見つけやすい
○…たくさんいるので、見つけやすい
△…少ない、または見られる時期が決まっているので、すこし見つけにくい
▲…とても少なく、見つけるのはむずかしい

※季節、場所、見つけやすさは大和市での例です（例外もあります）。

アゲハチョウ科

アゲハチョウ科は黄色や黒の大きなはねをもったチョウがたくさんいるグループで、多くの種類の後ろばねに尾状突起がある。**大和市には９種類いる。**成虫は春から秋にかけて２～３回現れる。いろいろな花を訪れるが、花に完全にとまることは少なく、はねを羽ばたかせたまま蜜を吸うことが多い。オスは湿った地面で水を吸うこともある。多くの種類の幼虫がミカン科の植物の葉を食べて育ち、幼虫は危険を感じると臭いつの(肉角または臭角という)を出して身を守る。アゲハチョウ科の中には幼虫で冬を越すものもいるが、大和市にいるすべての種類がさなぎで冬を越す。

アゲハ（ナミアゲハ）

春 夏 秋 LL ◎

はねはたくさんの黒い筋が入ったうすい黄色。キアゲハに似ているが前ばねのつけねは黒い筋になっている。幼虫はミカンやサンショウなどの葉を食べ、家の庭に植えられているミカンやユズ、キンカンの木で幼虫が見られることもある。

キアゲハ

春 夏 秋 LL ○

黄色いはねに黒い筋が入ってアゲハに似ているが、前ばねのつけ根は塗りつぶされたように黒い。夏に見られるものははね全体が黒っぽくなる。幼虫はニンジンやセリなどの葉を食べる。

アオスジアゲハ

春 夏 秋 LL ◎

黒いはねの中央に半透明の水色の帯が縦に入っている。尾状突起はない。とても速く飛び、高いところを飛ぶことも多い。幼虫は公園や道路脇に植えられるクスノキなどの葉を食べて育つ。

クロアゲハ

春 夏 秋 LL ◎

はねは黒く、尾状突起は短い。後ろばねの表は、オスでは上に横長の白い紋があり、メスでは赤い紋が大きくなる。アゲハと同じように庭のミカンの木などで幼虫が見られる。

カラスアゲハ

春 夏 秋 LL ○

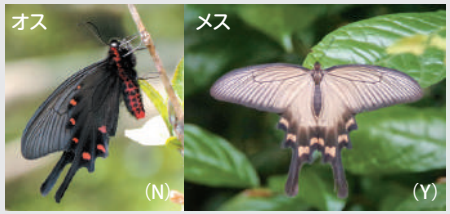
遠くから見ると黒く見えるが、近くで見るとはねの表は緑や青、紫色に美しく輝く。はねの裏は黒く、白い帯が入る。オスは前ばねの下のほうにビロード状の毛が生える。

ナガサキアゲハ

春 夏 秋 LL ○

日本のチョウの中で最も大きいもののひとつ。黒いはねには尾状突起がなく、メスは後ろばねに白い紋が現れる。もともとは南のほうに住むチョウだったが、温暖化の影響なのか、最近どんどん分布が北へ広がり、大和市でも2000年ころから見られるようになった。

その他のアゲハチョウたち



ジャコウアゲハ 春 夏 秋 LL ▲

胴体が赤く、オスとメスではねの色が違う。

オナガアゲハ

春 夏 秋 LL △

モンキアゲハ

春 夏 秋 LL ○

シロチョウ科は白や黄色の小さめのはねをもつチョウのグループで、**大和市には5種類いる。**明るい場所を好む種類が多い。ツマキチョウは春にだけ現れるが、他は春から秋にかけて何回も現れる。成虫は花の蜜を吸うが、オスが湿った地面で水を吸う種類もいる。幼虫はアブラナ科やマメ科の植物を食べて育つものが多い。キタキチョウは成虫で、モンキチョウは幼虫で冬を越すが、ほかはさなぎで冬を越す。白いチョウはモンシロチョウだけでなくスジグロシロチョウもいて、飛んでいる姿だけでは区別がむずかしいが、いる場所（野菜畑か野山）で区別がつく場合がある。

モンシロチョウ

春 夏 秋 M ◎

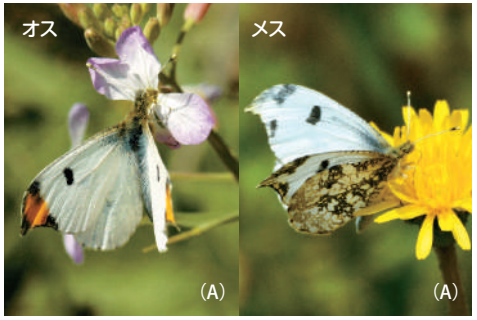
白いはねの表には黒い紋があり、前ばねの先が黒い。メスのはねは少し黒っぽい。白や黄色の花でよく蜜を吸う。幼虫はアブラナ科の植物を食べ、キャベツやダイコンの害虫になる。買ってきたキャベツに幼虫がついていることもある。

スジグロシロチョウ

春 夏 秋 M ○

モンシロチョウに似ているが、はねの筋（翅脈）が黒く、メスは黒い筋が太い。モンシロチョウよりも森に近いところにいる。幼虫はイヌガラシなど野生のアブラナ科植物を食べる。

ツマキチョウ



春 M △

前ばねの先がとがり、その部分がオスはオレンジ色でメスは白い。はねの裏はまだら模様。年に１回、３月から５月に成虫が現れ、幼虫はアブラナ科のタネツケバナなどを食べる。

キタキチョウ

春 夏 秋 M ◎

黄色いはねは表の外側が黒い。秋型はその黒い部分が小さくなる。はねに丸い紋はない。幼虫はネムノキやハギなどのマメ科植物を食べる。以前はキチョウと呼ばれていた。

モンキチョウ

春 夏 秋 M ◎

前ばねに黒い紋、後ろばねに黄色い紋がある。はねの色は、オスはすべて黄色、メスは白と黄色の２種類がある。日当たりのよい草地に住み、幼虫はマメ科のシロツメクサなどを食べる。

同じ種類で色や形が違うチョウ

多くの種類のチョウは、オスもメスもほとんど同じ色や模様で区別がつきにくいのですが、なかにはオスとメスではっきりとした違いがあり、別の種類のように見えるものもいます。たとえばジャコウアゲハ、ウラギンシジミ、ナガサキアゲハ、ツマキチョウ、ツマグロヒョウモン、モンキチョウなどです。

また季節によって色や形が変わるチョウもいます。春に現れる春型のアゲハやベニシジミは、夏に現れる夏型よりも明るい色をしています。キタテハやクロコノマチョウの秋型は夏型よりもはねがギザギザした感じになり、ウラギンシジミの秋型は前ばねの先が、よりとがります。

オスとメスの違いや季節による違いが分かってくると、観察がもっと楽しくなるでしょう。

⇧モンキチョウのオスとメス

⇧キタテハの夏型と秋型

タテハチョウ科

タテハチョウ科は大小さまざまなはねの大きさのチョウがいるグループで、**大和市には20種類以上いる。**はねを開いてとまるものが多く、はねの表が鮮やかな色の種類も、はねの裏は枯れ葉のような色をしていて目立たない。成虫は花の蜜を吸うものが少なく、樹液や動物の糞、熟した果物の汁を吸うものが多い。成虫の前あしはとても短く、とまるときは中あしと後ろあししか使わないので、４本あしのように見える。成虫で冬を越すものがいて、キタテハなどは冬でも暖かい日には飛んでいることがある。幼虫が葉で巣を作る種類がいる。さなぎは尻で逆さまにぶら下がる。

アカタテハ

春 夏 秋 L

前ばねは先が黒く、ほかは赤い。力強くはばたき速く飛ぶが、はねを開いたまま滑空することもある(タテハチョウ科のほかのチョウも滑空するものがいる)。幼虫はイラクサ科のカラムシなどを食べ、葉の表を内側にした二つ折りの巣を作る。

ヒメアカタテハ

夏 秋 M

アカタテハに似ているが色がうすく、後ろばねにも模様がある。幼虫はヨモギなどを食べ、茎の先で葉を何枚かあわせた巣を作る。ほぼ全世界で見られる世界共通種として知られる。

キタテハ

春 夏 秋 M

黄色というよりは茶色っぽいはねに黒い点が散らばる。秋型ははねがとがってギザギザする。春や秋には花の蜜をよく吸う。幼虫はカナムグラという草を食べ、葉で巣を作る。

ルリタテハ

春 夏 秋 L

黒いはねに濃い青の帯が入る。冬を越したものは青い帯が水色になることがある。幼虫はサルトリイバラなどを食べるが、庭に植えられたホトトギスで育つこともある。

コミスジ

春 夏 秋 M

はねを開いてとまったときに、横に３本の白い筋が入ったように見える。はねの表は黒いが、裏は茶色い。滑空をまじえて飛ぶ。幼虫はクズやニセアカシアなどのマメ科植物を食べる。

ツマグロヒョウモン

春 夏 秋 L

オレンジ色のはねに黒い点が散らばるが、メスは前ばねの先が紫色がかった黒になり、毒を持つカバマダラに似ている。もともとは南のほうにいるチョウだったが、どんどん北へ分布を広げている。幼虫はスミレ類を食べ、庭のパンジーで育つことも多い。幼虫で冬を越す。

その他のタテハチョウたち

ヒオドシチョウ

春 夏 L △

コムラサキ

春 夏 秋 L ▲

アサギマダラ

夏 秋 LL ▲

ジャノメチョウ

夏 L △

ゴマダラチョウ

春 夏 L ○

黒いはねに白い紋が散らばり、まだら模様になる。春型は白い部分が大きくなる。口は鮮やかな黄色。成虫は樹液などを吸い、幼虫はエノキの葉を食べる。最近、数が減っている。

アカボシゴマダラ

春 夏 秋 L ◎

ゴマダラチョウに似ているが、後ろばねに赤い紋がある。春型は赤い紋がなく、ほとんど白くなることがある。関東地方にいるのは中国のチョウを人が放したことで増えてしまった外来種。

さなぎの秘密と種類

落ち葉の下や土の中などでさなぎになる昆虫が多くいます。チョウのさなぎは幼虫が食べていた植物、またはその近くについているので、見つけやすいです。じっとして動かないさなぎですが、じつはさなぎのなかでは幼虫のからだが液状に溶けて、成虫のからだに作りなおされています。幼虫から成虫への大変身は、さなぎのなかで起こっているのです。

チョウのさなぎには、アゲハチョウ科、シロチョウ科、シジミチョウ科、セセリチョウ科に見られる、胸の部分に糸をかけるものと、タテハチョウ科だけに見られる、胸の糸がなく尻の先でぶらさがるものの2種類があります。

⇧胸に糸をかけるキアゲハのさなぎ(左)と、尻でぶら下がるツマグロヒョウモンのさなぎ(右)

テングチョウ

春 夏 秋 M △

頭の先が大きく出っぱり、てんぐの鼻のように見える。はねの裏は枯れ葉にそっくりで目立たない。古い化石が見つかっているため、生きた化石と言われている。

ヒメウラナミジャノメ

春 夏 秋 S ◎

灰色がかった茶色いはねに、多くの眼状紋(目のような模様)がある。はねの裏にはこまかい波のような模様もある。草はらをぴょんぴょん跳ねるように飛び、花の蜜をよく吸う。

クロコノマチョウ

春 夏 秋 L △

黒っぽいはねは、夏型では丸みをおび、秋型では少しとがる。はねの裏は枯れ葉にそっくりで、森の中でとまっていると足もとからいきなり飛び立つまで気がつかない。

ヒメジャノメ

春 夏 秋 M △

ヒメウラナミジャノメより少し大きく、はねの裏には中央に白い筋がある。花の蜜はあまり吸わない。

ヒカゲチョウ(ナミヒカゲ)

夏 秋 L ◎

はねの裏の眼状紋の内側に黒い筋がある。よく樹液に集まっている。幼虫はササやタケを食べ、幼虫で冬を越す。

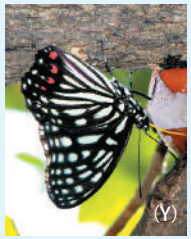
サトキマダラヒカゲ

夏 秋 L ○

はねの裏は眼状紋と白と黒の帯の複雑な模様。幼虫はタケやササを食べ、さなぎで冬を越す。

ほかの場所から来た生きもの(外来生物)

日本では奄美大島とその近くの島にしかいなかったアカボシゴマダラ。大和市にいるものは、中国から持ちこまれたものです。このような外来生物のために、その場所にもともといた生きものが暮らしていけなくなってしまうことがあります。飼っている生きものは、外国のものはもちろん、日本のものでも、むやみに野外に放すことは絶対にしてはいけません。



シジミチョウ科

シジミチョウ科はほとんどの種類がはねを閉じたときの大きさが1円玉より小さなチョウのグループで、**大和市に現在確実にいるのは12種類。**オスとメスではねの表の色が違う種類が多く、後ろばねに小さな尾状突起があるものもいる。花の蜜を吸う種類が多く、地面で水を吸うこともある。ウラギンシジミやムラサキシジミ、ムラサキツバメは成虫で冬を越す。ムラサキシジミやムラサキツバメの幼虫はからだから甘い蜜を出してアリを呼び、アリに天敵から守ってもらう。また、アブラムシなどを食べる肉食の幼虫もいるが、大和市にいるものはすべて植物の葉を食べる。

ベニシジミ

春 夏 秋 S ◎

はねがオレンジ色の小さなチョウ。はねのオレンジ色は、春型では明るく、夏型では暗い。春型の後ろばねの表には小さな水色の紋があることが多い。飛びたってもすぐ近くにとまる。幼虫はギシギシやスイバなどを食べ、幼虫で冬を越す。

ウラギンシジミ

春 夏 秋 M ○

はねの裏が真っ白なチョウ。前ばねは先がとがり、オスには赤い紋、メスには灰色の紋がある。秋に羽化した成虫は葉の裏にしがみつくようにして冬を越す。幼虫はクズなどを食べる。

ムラサキツバメ

夏 秋 S △

最近増えてきた南のほうに住むチョウで、後ろばねに尾状突起がある。はねの表はオスでは全体が黒っぽい紫色だが、メスは前ばねに明るい紫色の紋がある。成虫は集団で冬を越す。

ヤマトシジミ

春 夏 秋 S ◎

はねの裏はクリーム色っぽい白で、黒い点がはっきりしている。はねの表はオスはくすんだ水色でメスはこげ茶色。

ルリシジミ

春 夏 秋 S △

はねの裏は白で、黒い点は少しぼやけた感じがする。はねの表は鮮やかな水色だが、メスは水色の部分が小さい。

ツバメシジミ

春 夏 秋 S ○

はねの裏は白で、後ろばねにオレンジの紋と尾状突起がある。はねの表はオスは水色でメスはこげ茶色。

ミズイロオナガシジミ

夏 S △

年に1回、6～7月に現れる。後ろばねの裏にV字の黒い筋がある。はねの表は黒っぽく、小さな白い紋がある。

アカシジミ

夏 S ▲

年に１回、６月ころに現れる。はねはオレンジ色で、裏には白く細い筋が何本かある。夕方によく飛ぶ。

ウラナミアカシジミ

夏 S ▲

年に１回、６月ころに現れる。はねはオレンジ色で、裏は黒い紋が波のような模様に並ぶ。夕方によく飛ぶ。

ムラサキシジミ

春 夏 秋 S ○

ムラサキツバメに似ているが、小さくて尾状突起がない。はねの表の紫色の部分はオスのほうが大きい。

トラフシジミ

春 夏 S ▲

はねの裏が、春型は白と灰色、夏型は茶色の濃淡のトラ模様になっている。はねの表はオス・メスとも紫色。

ウラナミシジミ

夏 秋 S ○

はねの裏が波のような模様になっている。南からやって来て秋に多く見られるが、寒さに弱く冬を越せずに死んでしまう。

セセリチョウ科

シジミチョウと同じくらいの大きさの、茶色や黒の地味な色のはねをもつチョウが多いグループ。**大和市には６種類いる。**多くの種類は、前ばねを立てて後ろばねを開いた姿勢でとまることがある。はねとくらべて体が太い種類が多く、それらはとても速く飛ぶ。成虫はおもに花の蜜を吸うが、動物の糞や地面の水もよく吸う。ストローのような口が尻にとどくほど長く、水を吸っているときに尻から出した水(おしっこ)を吸い戻すことがある。多くの種類の幼虫はイネやササなどのイネ科植物を食べ、葉を巻いて糸でつづった巣を作る。ほとんどが幼虫で冬を越す。

イチモンジセセリ

春 夏 秋 Ⓢ ◎

茶色いはねで、後ろばねの裏に一列に並んだ白い紋がある。はねの色は表のほうが濃い。目で追うのがむずかしいくらい速く飛ぶ。春から見られるが、秋に多くなる。幼虫はイネ科の植物などを食べ、稲作の害虫となることがある。

ダイミョウセセリ

春 夏 秋 Ⓢ △

黒いはねに白い紋がある。とまる時はふつうはねを開き、閉じることはあまりない。幼虫はヤマノイモやオニドコロなどの葉を食べ、葉に切り込みを入れて折りたたんだ巣を作る。

その他のセセリチョウたち

コチャバネセセリ
春 夏 Ⓢ ○

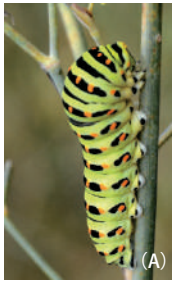
キマダラセセリ
夏 秋 Ⓢ ○

チャバネセセリ
夏 秋 Ⓢ △

アオバセセリ
春 夏 Ⓜ ▲

チョウの幼虫いろいろ

⇧アゲハ



⇧キアゲハ

⇧モンシロチョウ

⇧ゴマダラチョウ

⇧ルリタテハ

⇧ツマグロヒョウモン

⇧クロコノマチョウ

⇧ベニシジミ

⇧チャバネセセリ

⇧アオバセセリ

チョウの幼虫はいろいろな姿をしていますが、科ごとにだいたい似たような形になっています。ガの幼虫には毛が毒針になっていて人に刺さるものがいますが、チョウにそのようなものはいません。タテハチョウ科のチョウの幼虫の中にはトゲが生えているように見えるものがいますが、このトゲは柔らかく、人に刺さるようなことはありません。

増えたチョウ、減ったチョウ

大和市で1990年ころに見られたチョウと、最近見られるチョウはどちらも約50種類で、種類数はほとんど変わりません。しかし実際には昔はいたのに今は見られなくなったチョウ、反対に最近になって見られるようになったチョウがいるのです。

見られなくなったチョウ

イチモンジチョウ、コジャノメ、クロヒカゲ、ウラゴマダラシジミ、オオミドリシジミ、ゴイシシジミ、ギンイチモンジセセリ、ホソバセセリ、オオチャバネセセリなど。大和市のまわりの市では見られるのに、大和市で見られなくなったものもいて、その理由はよく分かっていません。

最近になって見られるようになったチョウ

ナガサキアゲハ※、ムラサキツバメ※、ウラナミアカシジミ、テングチョウ、ツマグロヒョウモン※、コムラサキ、アカボシゴマダラ、クロコノマチョウ※、アオバセセリなど。このうち名前のあとに※印をつけた4種類は温暖化の影響で北に分布を広げてきたといわれている南のチョウです。環境の変化によって住めるチョウが変わってくることが分かると思います。今から10年後の大和市はどんなチョウたちが暮らす街になっているでしょうか。

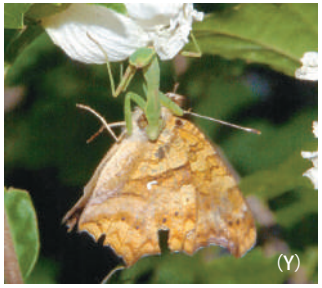
⇧大和市で見られなくなったオオミドリシジミ

チョウを狙う生きものたち

自然の中では強い生きものが弱い生きものを餌として食べる、弱肉強食という関係があり、チョウもさまざまな生きものに餌として食べられてしまいます。食べられてしまう生きものから見て、食べる側の生きもののことを天敵といいます。

チョウの天敵は多く、卵のときは寄生バチや寄生バエに卵を産み付けられ、ゴミムシなどに食べられます。幼虫のときは寄生バチや寄生バエ(卵のときとは違う種類)、カメムシの仲間のサシガメ、アシナガバチやスズメバチ、カマキリ、スズメやシジュウカラなどの鳥に狙われ、成虫になってからもトンボやカマキリ、クモ、鳥などに食べられます。

このようにチョウは卵のときから成虫になった後まで、つねに天敵に狙われています。メスが卵を産んでもほとんどが天敵に食べられてしまい、病気で死ぬこともあるので、成虫になるのはごくわずかです。だからチョウは1匹のメスがたくさんの卵を産みます。私たちが目にするチョウの成虫は、とても厳しい生存競争を勝ち抜いてきたのです。



⇧カマキリに食べられるキタテハ

⇧トンボに食べられるジャコウアゲハ

⇧クモに食べられるヤマトシジミ

成虫で冬を越すチョウ

チョウは種類によってどうやって冬を越すかが決まっていて、卵で越すもの、幼虫で越すもの、さなぎで越すものなどさまざまです。大和市にいるチョウでは、キタキチョウ、テングチョウ、アカタテハ、ヒメアカタテハ、ルリタテハ、キタテハ、ヒオドシチョウ、クロコノマチョウ、ウラギンシジミ、ムラサキツバメ、ムラサキシジミの11種類が成虫で冬を越します。このうちムラサキツバメは集団で冬を越すことで有名です。

⇧葉の上で集団越冬するムラサキツバメ(25匹以上が集まっています)

さくいん

アオスジアゲハ …… 6
アオバセセリ …… 16、17
アカシジミ …… 15
アカタテハ …… 10
アカボシゴマダラ …… 12、13
アゲハ …… 6、17
アサギマダラ …… 11
イチモンジセセリ …… 16
ウラギンシジミ …… 14
ウラナミアカシジミ …… 15
ウラナミシジミ …… 15
オオミドリシジミ …… 17
オナガアゲハ …… 7
カラスアゲハ …… 7
キアゲハ …… 6、12、17
キタキチョウ …… 9
キタテハ …… 9、10、18
キマダラセセリ …… 16
クロアゲハ …… 2、7
クロコノマチョウ …… 13、17
コチャバネセセリ …… 16
ゴマダラチョウ …… 12、17
コミスジ …… 11
コムラサキ …… 11
サトキマダラヒカゲ …… 13
ジャコウアゲハ …… 7、18
ジャノメチョウ …… 11
スジグロシロチョウ …… 8
ダイミョウセセリ …… 16
チャバネセセリ …… 16、17
ツバメシジミ …… 15、19
ツマキチョウ …… 8
ツマグロヒョウモン …… 11、12, 17
テングチョウ …… 12
トラフシジミ …… 15
ナガサキアゲハ …… 7
ヒオドシチョウ …… 11
ヒカゲチョウ …… 13
ヒメアカタテハ …… 10
ヒメウラナミジャノメ …… 13
ヒメジャノメ …… 13
ベニシジミ …… 14、17
ミズイロオナガシジミ …… 15
ムラサキシジミ …… 15
ムラサキツバメ …… 14、18
モンキアゲハ …… 7
モンキチョウ …… 9
モンシロチョウ …… 8、17
ヤマトシジミ …… 2、15、18
ルリシジミ …… 2、15
ルリタテハ …… 2、11、17

⇧交尾中のツバメシジミ

参考文献　「大和市の昆虫」大和市動植物総合調査会編 1991年 大和市教育委員会発行
「蝶の幼虫探索 ―神奈川県とその周辺地」相模の蝶を語る会編 2016年 相模の蝶を語る会発行

2017年３月発行

禁無断複製・転載

●発　　行：大和市（環境農政部みどり公園課）
〒242-8601　神奈川県大和市下鶴間1-1-1　☎046-260-5451
●編　　集：(公財)大和市スポーツ・よか・みどり財団
大和市自然観察センター・しらかしのいえ　歳清勝晴
〒242-0029神奈川県大和市上草柳1728　☎046-264-6633
●監　　修：岩田誠（1987～1990年大和市動植物総合調査会・昆虫部会員）
●協　　力：しらかしのいえボランティア協議会
●写　　真：赤松義幸（A）、中村美津子（N）、山﨑隆嗣（Y）
●編集協力：阿部雅諭、中村美津子、萩原陽子、本田実、山﨑隆嗣
●印　　刷：松代印刷株式会社